

January 18, 2026

## バプテスマのヨハネ

マタイ 3:1-4

3:1 そのころバプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べ伝えて、

3:2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言った。

3:3 この人は、預言者イザヤによって「荒野で叫ぶ者の声とする。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ』」と言われた人である。

3:4 このヨハネはらくだの毛の衣をまとい、腰には革の帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であった。

聖書は、イエスの生涯を語るとき、必ずバプテスマのヨハネについて語ります。それほどに、バプテスマのヨハネは大切な人物なのですが、彼はどのような人で、どんな役割を果たしたのでしょうか。

### 一、預言者

バプテスマのヨハネは、まず、預言者でした。

バプテスマのヨハネは祭司ザカリヤと妻エリサベツの間に生まれました。エリサベツにはそれまで子どもがいませんでしたが、高齢になってからやっと授かったのがヨハネでした。ヨハネは、祭司の子ですから、ほんらいは祭司となるはずでしたが、神は、ヨハネに特別な使命をお与えになりました。それは、主の預言者となって、人々に、やがて来られる救い主を受け入れる準備をさせることでした。それは、イザヤ 40:3 やマラキ 4:5-6 に預言されていました。

イザヤ 40:3 には「荒野で叫ぶ者の声とする。『主の道を用意

せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ』」とあり、マタイ 3:3 には「この人は、預言者イザヤによって『荒野で叫ぶ者の声がある。「主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ』』と言われた人である」とあって、ヨハネがイザヤが預言したその人だと教えています。マラキ 4:5-6 には「見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである」とあります。イエスは、ヨハネについて、「すべての預言者たちと律法が預言したのは、ヨハネの時まででした。あなたがたに受け入れる思いがあるなら、この人こそ来たるべきエリヤなのです」（マタイ 11:13-14）と言っておられます。つまり、ヨハネは、マラキ書が預言していた「エリヤ」であるのです。

旧約時代のエリヤは紀元前 870 年から 850 年頃に活躍し、バアルの預言者と対決したことで知られています。エリヤは預言者を代表する人物で、エリヤからマラキまで預言者が続いたのですが、マラキ以降 400 年の間、預言者が途絶えていました。けれども、救い主が来る前には、エリヤのような力ある預言者が起こると預言されていました。ヨハネは、そのような預言者として 400 年ぶりにイスラエルに預言を与えたのです。エリヤは「毛衣を着て、腰に革の帯を締め」（列王記第二 1:8）ていましたが、ヨハネも「らくだの毛の衣をまとい、腰には革の帯を締め」（4 節）ていて、外見においても、ヨハネはエリヤの再来でした。

預言者とは、神からの言葉を受けて、それを人々に語る人で

す。自分の考えや意見を述べるのではなく、神のみこころを人々に伝えるのが預言者の役割です。ヨハネは、その役割に忠実でした。ヨハネの福音書には、ヨハネが「あなたはだれですか。…あなたは自分を何だと言われるのですか」ときかれたとき、「私は、預言者イザヤが言った、『主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声』です」（ヨハネ 1:23）と答えたとき書かれています。ヨハネの福音書ではキリストが「ことば」と呼ばれています。まことの神である「ことば」に対して自分は「声」に過ぎないと言っているのです。バプテスマのヨハネの預言者としての忠実さ、また、謙虚さがよく分かります。

## 二、洗礼者

次に、バプテスマのヨハネは洗礼者でした。英語では“John the Baptist”と言って、バプテスマ（洗礼）を授ける人でした。

この時代のバプテスマは、ユダヤ人でない人たちがまことの神を信じ、ユダヤ教に改宗するときに受けるもので、偶像礼拝の汚れを取り除くことを意味していました。それで、ユダヤの人々は、そうしたバプテスマは異邦人には必要であっても、自分たちには必要のないものだと考えていました。民族として、すでにバプテスマを受けていると考えていたのです。彼らがどこでバプテスマを受けたかという、それは、出エジプトにまでさかのぼります。彼らの先祖がエジプトから脱出したとき、エジプト王ファラオは、大勢の奴隷を逃してしまったことを後悔し、騎兵隊や戦車を送ってイスラエルを追いかけました。人々が海岸に追い詰められたとき、神は海の中に道を作り、イスラエルを向こう岸へと渡らせました。しかし、同じように海

に入ったファラオの軍勢はもとに戻った水に吞まれて滅びてしまいました。つまり、イスラエルは水をくぐって救われたのです。それが、イスラエルが受けたバプテスマであると理解したのです（コリント第一 10:1-4 参照）。

ところが、バプテスマのヨハネは、異邦人が受けるバプテスマをユダヤの人々に授けていました。ヨハネは言いました。

「あなたがたは、『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で思っただけではありません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」

（マタイ 3:9）人々は、「自分たちはアブラハム、イサク、ヤコブと続く血筋につながっている。律法を持ち、神殿の儀式を守っている。自分たちは選ばれた神の民であって、異邦人のようではない」と、自分たちを誇っていました。しかし、「人はうわべを見るが、主は心を見る」（サムエル記第一 16:7）のです。神が求められるのは何よりも、「砕かれた霊、打たれ、砕かれた心」（詩篇 51:17）です。それで、ヨハネは「あなたがたは、名前だけの『神の民』で、実際は、異邦人以下になっている。異邦人と同じように、悔い改め、バプテスマを受けて、神の民として出直しなさい」と説教したのです。

ヨルダン川は北のガリラヤ湖から南の死海に注ぐ大きな川です。直線距離では 70 マイルほどですが、曲がりくねっているので、川の長さは 200 マイルにもなります。ヨハネは、この川沿いの荒野で神の言葉を語り、人々を悔い改めに導き、バプテスマを授けていました。エルサレムには神殿があり、ユダヤの町々には会堂がありました。しかし、当時のユダヤの宗教には神のことばがなく、人々を生かすものがありませんでした。ユダヤの会堂が立ち並ぶ都会が霊的には渇いた荒野で、ヨハネの

いた荒野が靈的には豊かな場所だったのです。

それで、自分の罪を知り、魂の渇きを知る人は、新しい歩みへの一步を求めてヨハネのところに來ました。今の時代の私たちも、人目をひく華やかなものに惹かれやすいのですが、そこに、ほんとうにたましいの渇きを満たし、新しい歩みへと導くものがあるかどうか、しっかり見極めたいと思います。真実なものを求め、そこに向かいたいと思います。

### 三、殉教者

第三に、ヨハネは殉教者でした。ヨハネの殉教のことはマタイ 14 章に書かれています。ヨハネの時代、かつてヘロデ大王が治めた地域は、ローマ総督がユダヤを、息子のアンティパスがガリラヤとペレアを、同じく息子のピリポがテラコニアなど北東部を治めていました。

ピリポの妻であつヘロディアは、ピリポとの間に娘サロメをもうけていたのですが、夫の母違いの兄弟ヘロデ（アンティパス）と恋仲になり、ピリポのもとを去ってヘロデのもとに行きました。ヘロデは自分の兄弟の妻をとって自分の妻としたのです。ヨハネはこのことを非難しました。ヨハネは、誰に対しても悔い改めを教えました。取税人であれ、兵士であれ、国王であれ変わりませんでした。ヘロデはヨハネから悔い改めを迫られたのですが、悔い改めるところか、ヨハネを捕まえ、投獄しました。聖書は、「ヘロデはヨハネを殺したいと思ったが、民衆を恐れた。彼らがヨハネを預言者と認めていたからであった」（マタイ 14:5）とも、「それは、ヨハネが正しい聖なる人だと思っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである」

(マルコ 6:20) とも書いています。ヘロデには揺れ動く気持ちがあったのですが、マルコ 6:19 に「ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いつつ、できずにいた」とあって、ヘロディアはどうかしてヨハネを殺してしまいたいと機会を狙っていました。

やがて、ヘロディアにとって絶好の機会が訪れました。ヘロデの誕生日の祝宴で、ヘロディアの娘サロメがとても上手な踊りを披露したので、ヘロデはサロメに「欲しい物は何でもあげよう」と誓って言いました。娘サロメは母ヘロディアに「何を願いましょうか」と尋ねると、ヘロディアは「バプテスマのヨハネの首を」と言って、ついに、ヨハネは獄中で首をはねられ、殉教に至ったのです(マタイ 14:1-12、マルコ 6:14-29、ルカ 9:7-9)。人の心は罪に征服されると、こんなに恐ろしいことを平気で行うようになるのです。これと同じようなことは、今にいたるまで続いています。人の罪の恐ろしさを思います。だからこそ、人は罪を悔い改め、救われなければならないのです。

ヨハネの生涯は短いものでした。また、彼が預言し、バプテスマを授けた期間も短く、2~3年くらいだろうと思われまふ。しかし、彼は立派に神からの使命を果たし終えました。イエスはヨハネについて言われました。「ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに喜ぼうとしました。」(ヨハネ 5:35) ヨハネはイスラエルの最も暗い時代を預言の言葉で明るく照らしました。けれども、ヨハネは決して、その光を自分を照らすためには使いませんでした。自分のあとに来られる方、救い主を照らし、指し示すために使いました。「使命」という言葉は、「命を使う」と書きま

すが、ヨハネは救い主を指し示すために、文字通り、自分の命を燃やし尽くしたと言ってよいでしょう。

ヨハネは英雄的な人物でしたが、決して傲慢ではありませんでした。ヨハネの弟子たちが、ヨハネに言いました。「先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証しされたあの方が、なんと、バプテスマを授けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています。」（ヨハネ 3:26）そのとき、ヨハネはこう答えました。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」（ヨハネ 3:27-30）ヨハネは、イエスを「花婿」、イエスを信じる者たちを「花嫁」にたとえ、自分を「花婿の友人」にたとえています。結婚式で注目を浴びるのは花婿、花嫁でなければなりません。花婿の友人、ベストマンや花嫁の友人、ブライドメイドが、花婿、花嫁よりも目立ってはおかしいでしょう。ヨハネが自分を「花婿の友人」にたとえたのは、彼が自分の使命を正しく理解していたことを示しています。神を信じる者、イエスに従う者の努めは、いつでも、神の存在とみわざ、イエス・キリストの救いを指し示し、人々に知らせることなのです。

イエスはやがて、花婿として、花嫁であるキリストを信じる者たちをご自分のもとにお迎えになります。それはイエスの再臨の日です。ヨハネがイエスが最初に来られたとき、イエスを

証しして、人々にイエスを迎える準備をするように告げましたが、今の私たちは、イエスがもう一度来られる前に、人々がイエスを受け入れ、再臨の日にはイエスに花嫁として受け入れられる喜びを味わえるよう備えをさせるため、イエスを証しするのです。キリストを信じる私たちは、現代の「バプテスマのヨハネ」なのです。ヨハネの御言葉に対する忠実さ、神の前での謙虚さ、また、主を畏れて人を恐れない勇気などを学び、それに励まされて、それぞれの努めに励みたいと思います。

### (祈り)

父なる神さま、聖書には、数多くの信仰に生きた人々のことが書かれています。私たちは、その一人ひとりから多くのことを教えられ、励まされています。きょう学んだバプテスマのヨハネを通して、その忠実さ、謙虚さ、また勇気を教えられました。どうぞ、その一つでも自分の身に着けて実行できますよう助けてください。主イエス・キリストのお名前です。